０２／０４／１４　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主題：世の終わり　２
聖書箇所：マルコの福音書　１３章１４節～３７節

イエス様が世の終わりを預言され、弟子たちはいつそれが起こり、どんな前兆があるのか尋ねました。そして、先週、4 つの前兆について学びました。これに続いて、イエス様は、世の終わりの確実性と警告についても話されています。今週、私たちは患難時代の後半の部分を見ていきましょう。
A. 患難時代の後半に起こること。
1. にせキリストが王座に就く。
これは旧約聖書のダニエル書の預言の成就です。ダニエル書 9 章 27 節に「彼は一週の間多くの者と堅い契約を結ぶ。」とあります。ヨーロッパに 10 の国の連合国が誕生し、かつて存在したローマ帝国のようなものが再建され、そこに一人の指導者が立つと教えられています。ダニエル書の中で「小さな角」と記されている人物です。この人物がヨーロッパの連合国を治めるのです。この「彼」はこの人のことで、「一週間」というのは 7 日間ではなく、7 年間を指しています。ですから、その人物はヨーロッパの連合国を治め、7 年間イスラエルと平和条約を結ぶというのです。
　今私たちはその預言の目撃者です。ヨーロッパで通貨の統合が行われました。今のイスラエルを見ると、大変な状況にあることがわかっています。そしてこれからイスラエルはだんだん窮地に追いやられ、だれかがイスラエルを守らなければならなくなってくる。それがこの人物です。この人物は今確実に働きをなしています。
　また 27 節に、「半週の間、いけにえと捧げものとをやめさせる」とあります。ということは、7 年間の始まりの時に、このにせキリストがイスラエルがかつて行ってきたようないけにえや捧げものを認めるのです。宮が再建され、かつてのような礼拝が行われます。しかし、その後、半週の間――7 年間の半分、3 年半たったときにこの人物はそれをやめさせると預言されているわけです。
　その後、27 節の後半には「荒らす忌むべきものが翼にあらわれる」とあります。翼というのは欄外に「神殿に」とあります。翼は冒_を表します。実はこの人物はイスラエルの聖なる宮を汚すのです。この人物は宮の中で自らを神として崇拝させようとするのです。そのことが黙示録の 13 章に記されています。4 節に、「竜を拝んだ」「獣に権威を与えた」と記してあります。獣というのが連合国を治める人物で、竜、つまりサタンがその人物に権威を与えたと教えるのです。そしてにせキリストは 42 ヵ月間、つまり 3 年半活動する権威を与えられます。15 節には、獣が物を言うようにし、獣を拝まない者を皆殺させたとあります。テサロニケ第２の手紙 2 章 4 節にも同様の記述があります。
　そして、マルコの福音書の 13 章 14～23 節までは、イエス様の警告が記されています。山には洞窟があって、身を隠すことができるから山に逃げなさいとか、家に戻っている余裕はないから早く逃げなさいと言うのです。19 節に、すべての人々に大変な苦しみが訪れるとあります。この地域は冬には雨が多く、鉄砲水になって川を渡ることができなくなります。だから、それが冬に起こらないように祈りなさいともおっしゃっています。そうでないと、すべての人が死んでしまうからです。そして神様は人々を苦しめる期間を短く 3 年半と区切ってくださったというのです。
　21～23 節では再臨について間違った教えによって惑わされるから、気をつけなさいとあります。22 節では、にせキリストやにせ預言者があらわれて、しるしや不思議なことをするようになるとあります。今、私たちの周りにそんなことがいっぱい出てきています。そういうことをして神様の真理から離れさせようとするのです。キリスト教界においても、人々はみことばだけでは不十分だから、いろんなものを体験すること、経験することに、信仰の成長の鍵があると思って、そういう方向に走り始めるのです。ヨハネ第一の手紙 4 章 1 節でヨハネも警告しています。23 節の「気をつけていなさい」というのは現在形で、いろいろな形で悪魔はあなたたちを惑わそうと、誘惑の手を伸ばし続けているから、ずっとこれからも気をつけていなさいというのです。

2. 天変地異が起こる。(24―25 節)
次に、この自然界に大変なことが起こるというのです。実は、黙示録の中に幾つかの裁きが出てきます。例えばしるしによる裁き、ラッパによる裁き、鉢による裁きがあります。7 つのしるしというのは患難時代全体を指します。ラッパというのは患難時代の終わりを指します。鉢というのはその終わりのまた終わりを指しています。この二つの裁きを見てみますと、天変地異のことがもう少し詳しく記されています。ラッパの裁きの 1 つ目は、この世界の植物の 3 分の 1 が焼けてなくなるというのです。また海の生

物の 3 分の 1 がなくなり、また地上の淡水の 3 分の 1 が汚染されて、苦くて飲めなくなる。そして天体の 3 分の 1 が暗くなり、太陽も月も星もその光が 3 分の 1 になって、昼間も暗くなると記されています。（黙示録 8・9 章）
鉢の裁きの中にも、海の中のすべての生き物が死に、また淡水の源が血に変わるとあります。これは恐らく赤潮のようなことが起こるのではないかと言われています。また太陽の熱で焼き殺されてしまうというようなことが出てきます。（黙示録 16 章）また今までになかったような大きな地震が起こって、それによって地形が変わるとも記されています。

3.　再臨が起こる。（26・27 節）
そして、イエス・キリストが地上に帰って来られる地上再臨が起こると記されています。この時、人々は偉大な力を帯びて、栄光を帯びて帰って来られるイエス様を見て、はっきりとイエス様が誰であるかを知るのです。1 テサロニケ 4 章に出てくる空中再臨は一瞬のうちに起こりますから、空中再臨の時、人々はそれを見ないのです。だからこの地上でイエス様を信じていない人々は、人々がいなくなってしまって一体何が起こったのかと驚きます。しかし、イエス様が地上に帰って来られる時には、この世界の人々は、このイエス・キリストこそがサタンにも悪霊にもすべてのものに打ち勝たれた勝利者であり、人間がどんな最新兵器を用いても、どうにもならない最強の方であることに気づくのです。そして最後の戦い、ハルマゲドンが起こるのです。にせキリストたちは多くの軍隊を集めて、イエス・キリストに戦いを挑もうとします。しかし、イエス様は一瞬のうちに彼らを滅ぼされ、にせキリストがその後滅ぼされていくのです。
人々はイエス・キリストが救い主、まことの神であることに気づくのです。イエス様は天使と聖徒、つまり私たち信じる者を伴ってこの地上に帰って来られます。そして、天使たちが患難時代の終わりまでに救われた人々をみんな集めて来るのです。この人たちは肉体を持ったままで、千年王国に入ります。では、救われていなかった人々はどうなるのかは、ここでは言及されていません。しかし、マタイの福音書を見ると、24 章 30 節に「悲しみながらイエスの再臨を見る」とあります。この方が唯一の救い主であり、まことの神であることを知った時に、自分たちはこの方を受け入れずに、この救いを逃してしまったことに気づくのです。だから彼らは悲しむのです。そして、その後、彼らはゲヘナに投げ込まれ、千年王国の終わりによみがえって、神の前で最後の審判を受け、永遠の地獄に至るのです。
かつてマタイの福音書 25 章の中で、異邦人の裁きを学んだことがあります。神様が救われている人々である羊と救われていない人々であるヤギとに分けるという話です。その裁きはこの時に起こるのです。神様は人々の中で救われている者を祝福の中に、救われていない者をのろいの中に置かれるのです。

B. 世の終わりがいつ来るのか。
私たちは、患難時代の終わりに起こるさまざまな兆候を見てまいりました。この世の終わりの確実性を、当時の人々がよく知っていたいちじくの木の例えを用いて教えられています。いちじくの木に実がなりそうなのを見て、夏が近いことを知るように、こういう出来事が起こるのを見たら、主の再臨が近いこと、世の終わりが近いことに気づくことだとお話になったのです。30 節では、これらのことが全部起こったら、この世の終わりが来ると教えられたのです。
31 節では「この天地は滅びます。」とイエス様は断言されたのです。人々はこの世は恒久的だと思い、弟子たちもこの神殿を見たときにこれはいつまでも残るものだと思ったのです。ところがイエス様は、必ず審判の日が来ること、この天地が必ず滅びることを明らかにされます。しかし、イエス様は「私の言葉は決して滅びない。」と言われます。だから、あなたの救いに関しても、神様が約束されたことは永遠に変わらないから信じるのです。聖書は私たちに、この約束は神の約束であり、絶対に変わらないと教えています。
イエス様は 32 節で、その時がいつかは誰も知らないとおっしゃいました。人間はいつ終わりがやって来るのか知りたくて仕方がないのです。天使も知らないし、子――ご自分も知らないと。ここで子と言っておられるのは、ご自分が人間であることを明らかにし、人として、どのような態度をもって、世の終わりを考えるべきかをイエス様が教えてくださっています。それはいつ起こるかわからないし、それがいつ起こるかを探ろうともしない。全部神様の御手のうちにあることだから、その方にお任せしますという態度です。必ず起こるからそれがいつかを心配する必要はないのです。だから、この世の終わりに生きている私たちにとって、「あなたのみこころのままになしてください」という態度が、特に大切だということをしっかりと学んでいくことが必要です。
この 33 節から 37 節には 3 つの警告が記されています。
(1) その日がいつ来るかわらないから、気をつけていなさい、目を覚ましていなさい。

(2) あなたに与えられた責任を果たしなさい。
イエス様がこの世に帰って来られる前に、神様は私たちを救い、責任を与えたのです。私たちには、きょうという一日をどんなふうに生きるかという責任があるのです。
(3) 後悔しないように日々を過ごしなさい。
イスラエルで夜、旅をするといろいろな危険が待ち受けていました。だから、まさか夜中に主人は帰って来ないと人々は油断してまいます。しかし、イエス様はいつ帰ってくるかわからないから、いつでもしっかりと準備をしておきなさい、そのために時間を無駄にしてはいけないというのです。
テサロニケ教会には、すばらしいクリスチャンたちがいました。しかし、ここに偽りの教えを持つ者が入り込んで、イエス様の再臨はもう既に起こってしまった、主の日はもう既にやって来たのだと言い始めた。それを聞いたテサロニケのクリスチャンたちは動揺したのです。そこでパウロはテサロニケ第二の手紙を書いて、彼らに真実を教えようとしました。
　テサロニケ第二の２章２節に、「もう主の日が既に来たかのように言われているのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がしたりしないでください。」とあります。パウロは、主の日の前にはこういう出来事が起こるのだから、まだその日は来ていない。しかし、主の日は近いから、あなたたちはその日に備えてこんなふうに生きていきなさいと 3 つのことを教えています。それは今の私たちにも通じるところがあり、私たちこそそのメッセージを聞かないといけないのです。
　今から 2000 年前、世の終わりに臨んでいると思っていた彼らに対して、パウロは 1 つ目に、しっかりと聖書に立ちなさい（15 節）と言っています。いろいろと間違った教えや奇跡を行う人が出てくる。そのような人たちから自らを守るためには、しっかりとみことばに立ちなさい、不思議なことが起こったら、みことばがそのようなことを教えているのかどうか、見てみればいいというのです。2 つ目に、みことばを実践することだとあります。（16～17 節、3 章 4 節）3 つ目はどんなときにもみことばを信頼しなさいと言うのです。（3 章 5 節）疑わずみことばの約束にしっかりと立っていきなさいというのです。

　さて、今日私たちはマルコの福音書の中から、世の終わりについて語られたイエス様のメッセージを見てきました。世の終わりは確実にやって来ます。今この地上のどこかに、にせキリスト、非常に政治的な力を持つ人物が存在していることを我々はみことばを通して知ることが必要です。そして自然界にいろいろ不思議な現象、災害や天変地異が起こります。こういう出来事は、空中再臨で我々クリスチャンが天に上がってしまった後、この地上に起こることです。でも、今、患難時代に起こる出来事が私たちの目の前で起こっています。つまり患難時代が非常に近い、キリストの空中再臨の日が非常に近いということを覚えることが必要です。世の中には混乱をもたらすものがいっぱいあり、私たちの教えが混乱することがあります。そんなときは、みことばに立つことです。そしてしっかりとみことばにあって成長していくことが、主にお会いするのに最もふさわしい備え方です。

イエス様を信じておられる皆さん、私たちは日々のニュースを見る時に、キリストが私たちを迎えに来てくださる日が近いことを覚えて、その日を心待ちにすることです。しかし、同時に私はなすべきことを十分にしているのかどうか、私の関心は地上なのか天なのか、そのことを覚えて、きょうという一日を歩むことです。
　イエス様をお信じになっておられない皆さん、あなたはキリストが帰って来られる時に、悲しみながらそれを迎えるのでしょうか。それとも喜びながら迎えるのでしょうか。あなたが神を拒み続けているから、あなたには呪いの約束があるのです。それは神様の意地悪ではなく、あなたがそれを必要としないという選択をしたからです。その過ちを、その罪を認めて、あなたを救うことのできる救い主の前に救いを求めて出てくることです。